

目的 最近草木染と称する冷たいピンクの色の紅花染が、いかにも紅花染を代表する色であるかのように、店先きを飾っています。

ところが、紅花染全盛だった江戸時代の服飾品には、黄味ずんだ赤（紅絹）とか、からくれない（赤）が多く、きれいなピンクの紅花染は非常に数が少ないのです。

「なぜなのか…」私は昭和26年来紅花一すじに研究してきましたが、ようやく紅花染のかなめに、フットライトをあてることができました。

方法 この問題を解決するためには、次の2点がいとぐちだと判断しました。

第一点は原料は紅花餅（はなもち）で、乱花（散花）ではない。第二点は、紅花餅の主役は紅作りで、その工程の中で流出する紅色素を回収して染色に使ったのではないか。

それには、紅花餅の製法、紅作りの工程を、江戸時代さながらの方法で復元してみることです。

結果 紅花餅は固く圧搾し、保存や運搬に便利なようにしたもので、紅色素の含有量は乱花の10倍と大変多いのですが、精製紅を作りますと、0.5%と微量です。とてもこんな高価な紅を染色に用いるわけには行きません。これがピンク色の少ない理由です。

次に紅作りの工程では、紅花餅を水に浸して揉みほごすことから始まります。水溶性の黄色素と共に、粉状となって紅もまた飛び出します。高価な紅花餅ですから、これを回収して染色に用いました。

紅絹（もみ）は揉みに関係があるのではないかと考えています。